

# Last Regret

A・R・U・K・A・Sさん 原案  
八神大輔 著

さわやかな朝に、目覚ましのベルが鳴り響いた。

三上智也はほぼ無意識の動作でベッドから腕を伸ばし、時計を沈黙させる。そしてそのまま布団をかぶり直し、再び安らかな眠りに入ろうとした。

しかし、そのすぐあとに、今度は違うベルが鳴った。電話の音だった。

智也は寝返りを打って電話に背を向け、無視を決め込んだ。しかし、電話は辛抱強く鳴り続けた。

「……だあああつ、なんだよ、こんな朝っぱらから……」  
ついに根負けして起きあがると、机に置いてあった電話の子機を取る。

「もしもし」

いかにもぶっきらぼうなその声に答えたのは、聞き慣れた、けれど今日は少しかすれた声だった。

「……あ、智也、起きてた？」

「……今、起きた」

ぶっきらぼうなのはそのままだったが、幾分智也の口調は柔らかくなっていた。この声で起こされるなら悪くない。そう思った。

「どうしたんだよ、かおる。こんな朝から」

「うん、ごめんね、私、風邪引いちゃってさ……」

そこで、電話の相手 音羽かおるは、何度か咳き込んだ。

智也はベッドから起きあがり、受話器を握りなおした。眠気はすっかりどこかへ行ってしまうていた。

「風邪？ 大丈夫か？」

「うん、熱がちょっとあって……。だから、今日はお休みするから……」

「わかった。 だけど、そんなことでわざわざ電話してこな

くていいんだぞ。病人は、ちゃんと寝てる」

「うん……でも、駅で待っててもらったら悪いから……」

「……パーカ。つまらない気の使い方するなよ」

内容とは裏腹に、智也の言葉は優しくいたわるように囁かれた。

かおるにもそのことはちゃんと伝わっていたから、彼女は微笑んで頷いた。

「うん、そうだね。たまにはヤキモキさせてやればよかった」

「なに云ってんだ。……今日は土曜だから、学校終わったら、見舞いに行くよ。ちゃんと寝てるよ、ほんとに」

「うん、ありがと。……じゃあ、気をつけてね」

「おつ。あとでな」

「……待ってる。行つてらっしゃい」

電話を切って、智也は子機を机の上に戻した。

かおるの病状は心配だったが、それでもなんとなくにやけた気分になってしまふ。

(行つてらっしゃい……か)

そういうのも悪くない……微笑みつつ立ち上がり、智也は登校の準備を始めた。

\*

智也が駅に着いたとき、いつも通り唯笑はもうそこで待っていた。智也の姿を認めて、大きく手を振っている。

「智ちゃん、おはよう」

「おう。行こうぜ」

唯笑に挨拶を返すと、そのまま改札に向かう智也を、慌てて唯笑は追った。

「あれ？ 音羽さんは？」

「風邪で休みだつて。電話あつた」

「そうなんだあ。大丈夫そう？」

「うん……電話で話した感じでは、めちゃくちゃ悪そうって

風でもなかつたけどな」

「そっか。よかった」

そんなことを話しながら、ちょうど到着した電車にふたりは乗り込んだ。

かおるの電話のおかげで智也はいつもより早く起きていたので、電車は若干空いていた。そのせいか、唯笑は智也とほんの少し距離を置いて立っていた。

しばらくは、今日の宿題の話や昨日見たテレビの話など、とりとめのない、いつも通りの会話が続いた。

だが、電車が澄空駅の一つ手前の駅に入ろうとしたとき、激しい急ブレーキがかけられ、電車が大きく揺れた。

「きゃあっ」

「……おっと」

たまらず転びそうになった唯笑を、智也が支える。

ホームから人が落ちたため急停車を……というアナウンスを、智也は舌打ちしつつ聞いていた。

「ちえっ。たまに早起きするとこれだ。でもまあ、これで電車が遅れることを考えれば、ちょうどよかったってことか」

「……」

「……唯笑？」

返事がないのを訝しいと思って智也が振り向くと、唯笑は真っ赤な顔をしてうつむいていた。

そのとき、智也は今の体勢が、唯笑を胸に抱いた形になっていることに、ようやく気づいた。

「あ……悪い」

「うん、うん、唯笑こそ、ごめんね。ありがとう」

慌てて体を離すと、唯笑は先ほどよりまた少し智也と距離を置いて立った。

なんとなく、奇妙な沈黙が降りる。唯笑がこんな風に黙ってしまふことは、今までなかった。智也はバツ悪げに頬をかきつつ、話題を探した。

「……あ、今日さ、放課後、かおるの見舞いに行くつもりだ

けど……唯笑も行くだろ？」

「え……」

唯笑はゆっくりと面を上げ、智也のほうを見た。

意外そうな表情のあと、一瞬、唇を噛み、そして、笑顔を浮かべた。

「ごめん、今日は友達と約束があるんだあ」

「……そっか、じゃあ仕方ないな」

「うん、ごめんね。音羽さんによろしく云つといて」

なんとはない不自然さに、智也も気づいた。しかし、ちょうど口を開こうとしたとき、運転再開のアナウンスが流れ、氣勢をそがれてしまった。

結局、それきり無言のまま、ふたりは一駅間、車窓を眺めて過ごした。

かおるが退屈のあまり何度目かの寝返りを打ったとき、インターホンを鳴らす音が聞こえた。

「……あ」  
期待に頬を染めつつ、かおるは布団を直した。髪が乱れていないか、今更気になってしまったが、今からでは間に合わない。

そんなことを考えていると、ドアがノックされ、母親が顔をのぞかせた。

「かおる、起きてる？ 智也さんがお見舞いに来てくださったけど……」

「あ、うん、大丈夫だよ」

照れ笑いを浮かべつつかおるが答えると、母は頷いていった。ドアを閉めた。そのあと、智也を案内してくる足音が聞こえ、再びドアが開かれた。

「わざわざすみません。ごゆっくりどうぞ」

「あ……はい、すみません」

照れ臭そうに頭をかきつつ、智也が部屋に入ってきた。かおるを見て、笑顔で軽く手を挙げる。

「すぐにお茶をお持ちしますね」

「あ……いえ、お構いなく……」

「もう、お母さん、いいから」

そうかおるが云うと、母は残念そうにしつつ部屋を出た。ドアを閉める前にかおるにウインクする。

智也とかおるは同時にため息をついた。

「……ごめんね、相変わらずで」

「いや……いいお母さんじゃん。何しに来たって冷たくされるよりは全然いいよ」

苦笑しながら、智也はベッドのそばにかおるの椅子を持ってきて座った。

実際、彼女の母親が好意的なのは、男の子にとっては非常にありがたいことだ。それがわかるほどには、智也は女の子とつきあつたことがなかったが……。

かおるはベッドから上体を起こし、カーデイガンを羽織った。

「思ったより具合よさそうだな。安心したよ」

「ありがと。午前中にお医者に行ってきたからね。薬飲んで寝たら、だいぶ熱も引いたみたい」

「そっか」

他愛のない話をしてしていると、かおるの母が珈琲とお菓子を持ってきてくれた。談笑の輪に加わりたそうな母をかおるがどうか追いつくと、ふたりはまた目を見交わして笑った。

「……でも、ひとりで来たんだ。智也のことだから、照れ臭いとか云って、今坂さんと一緒に来るかと思ったけど」

「ああ……」

そこで智也は、今朝の出来事を思い出した。不自然な唯笑の態度。今思えば、ああいう不自然さは、今朝が初めてではなかったような気がする。

沈黙して珈琲に口をつける智也を、かおるは小首を傾げて見つめた。

「誘ったんだけどさ、約束があるって断られたんだ」

「ふーん」

「……でもさ、なんか変なんだよな、あいつ」

「……変……？」

一瞬、かおるの瞳をよぎった不安。うつむいて自分の考えに没頭している智也は、それに気づかなかつた。

「うん……なんて云うんだろ……。極端に云えば、俺たちを避けてるっつーか……」

「……」

「考え過ぎかな」

顔を上げて、智也は笑った。しかし、かおるの真剣な、そして悲しげな視線にぶつかり、やや戸惑った。

「やっぱり……つらいのかな、今坂さん」

「え……？」

「私たちといることが……というか、私といる智也を見ていることが」

「……」

「だから、距離を置こうとしているのかも……。なんとなく、そんな気は、してた」

「……そんな……」

苦い笑みを浮かべて、かおるは智也から目をそらした。智也は言葉もなく、その横顔を見つめていた。

確かにかおるとつきあい始めたとき、唯笑との関係も変わっていかもしれない、と考えた。しかしそれはリアリティのある考えではなかったし、実際、唯笑は何も変わらない風に接してくれた。

これまでと同じように。ただずっとそばにるのが当たり前前だった、子供の頃と同じく。

「私がおんなこと云々と……すぐ自分勝手に聞こえちゃうかもしれないけど……」

智也から目をそらしたまま、かおるが言葉を続けた。

智也は自分でもよくわからない不安を抱えたまま、話の続きを待った。

「しょうがない……ことなのかなって……思う……」

「しょうがないって……？」

「うん……」

そこをかおるは智也のほうに向き直り、正面からその目を見つめた。

かおるのその瞳は悲しみや痛み、そして不安で潤んでいるように見え、智也は訳もなく胸が痛んだ。

「今坂さんは……やっぱり、智也のことが好きなんだよね……？」

「それは……」

自分でも驚くほど狼狽し、今度は智也から目をそらして

しまった。

そのことは、三人が三人とも気づいていながら、これまで決して話題にしなかったことだった。

仲のいい三人の友達。その絆組みを壊したくなくて。

けれど実際には、変わっていくものに気づかない振りをしていただけなのかもしれない。そしてその変化を望んだのは、「新しい日常」を掴んだのは、ほかならぬ智也なのだ。

その新しい日常に、唯笑がいらないなんてことは、考えもせず

沈黙した智也を、かおるはやはり悲しげに見つめたまま、話し続けた。

「報われないと知って……それでも好きなひとのそばにるのは、つらい……。彼女がそう考えたのなら、私たちにはなにも……」

「……」

「ごめん。勝手なことばかり云ってるね、私」

「かおる……」

瞳に涙をためてうつむくかおるの手を、智也は思わず握った。

かおるが顔を上げて、智也を見る。

かおるがそんな風に胸を痛めることではない。俺が自分で、ケリをつけなければいけないことだ。

様々な迷いを抱えながらも、そのことだけは智也にもわかった。

「すまなかった。かおるにも唯笑にも、俺は甘えてたな」

「智也……」

智也は立ち上がり、かおるを抱きしめた。かおるは目を閉じて、智也の胸に頬を寄せた。

「もうこんな想いはさせない。約束する」

「うん……」

智也の腕の中で、かおるは小さく頷いた。智也のその気持ちに、嘘はなかった。

なかつたけれど……まだ、迷いがあった。  
その迷いが、智也からそれ以上の言葉を奪い、ただ彼はか  
おるの髪を撫で続けた。  
かおるもまた何も云わず、智也の腕に抱かれていた。

3

「三上くん、次はそちらをお願いします」

「……」

「……三上くん？」

「……」

「……あ、あれ？」

手にしていた本の重みが急に消えたことで、智也は我に返った。顔を上げると、智也から本を取り上げた詩音が、背伸びをしながら書棚の上のほうにしまおうとしている。

「あ……悪い」

慌てて智也は詩音に近づき、その本を取って書棚にしまった。

さて、次は……と振り返ると、詩音がじっと視線を注いできていた。

「な……なに？」

無言の詩音には、奇妙な迫力がある。智也はややうろたえつつ尋ねた。

詩音は答える前に、軽くため息をついた。

「……手伝ってくださるのはありがたいですが……こう、ぼーっとしっぱなしでは……」

「え……そんなに？ 悪い……」

頭をかきながら謝る智也を、詩音はまた少し見つめた。その表情には咎めるようなものはなく、ただ気遣わしげに眉をひそめていた。

「双海さん？」

「……休憩しましょうか」

智也の返事を待たずに、詩音は図書室の隅の机に向かった。そこは以前、智也と詩音と一緒に試験勉強をした場所でもあった。

途中、貸し出しカウンターを經由して、詩音は自分の鞆から愛用の魔法瓶を取り出して持ってきた。カップに紅茶を注ぎ、向かいに座った智也に差し出した。

「どうぞ」

「サンキュ」

智也は香りをしばらく楽しんだあと、一口紅茶を飲んだ。相変わらず極上の味だ。ただうまいだけでなく、心身の疲れが癒されるような気がする。鬱屈した気持ちも、つかの間、晴れるような。

「やっぱ双海さんの紅茶がいちばんだな」

「ありがとうございます」

小さく微笑んで、詩音はもうひとつカップを取り出し、自分の分を注いだ。その様子を、智也は少し感慨深げに眺めていた。

カップをふたつ持ってくるということは、誰かとお茶を飲むことを想定しているということだ。それが常に自分のためだと思っただけで自惚れてはいなかったが、かつては他人との交渉を完全に拒んでいた詩音の変化を思うと、智也は嬉しかった。

今日も、詩音のほうから本の整理を手伝ってほしいと頼まれたのだった。かおるも一緒に手伝おうとしたのだが、まだ少し熱があったようなので、智也が帰らせた。

本当は、土曜にあんな話をしたばかりだから、智也は少しでもかおるのそばにいてやりたいと思ったのだが、あんな話をしたばかりだからこそ、いつも通り自然に振る舞うべきなのかも、という気もしていた。

放課後の図書室には、今日も人気がない。

沈黙が降りると、どうしても智也は自分ひとりの考えに沈み込んでしまった。

詩音も何も云わずただ智也を見つめていたが、ややあって、意を決したように話し始めた。実際、他人の感情に踏み込もうとすることは、彼女にとって勇気のあることだったに

違いない。

「何か……ありましたか」

「……え？」

「ふさぎ込んでいらっしやるようですから」

「あ……」

詩音がそんな風に気を遣ってくれることに、智也は感動を通り越してほとんど茫然としていた。けれど、すぐに感謝の意を込めて、笑顔を浮かべた。

「悪い。なんでもないよ」

「そうは見えません。それに……」

「？」

「今坂さんも……最近、なんだか元気がないようすし……」

「……」

「……」

智也は正直、驚いて目を瞠ってしまった。そんなことにまで気づいていたなんて。

そういえば、詩音は唯笑とは割とよく話していた。唯笑が一方的に話しかけているだけかと思っていたが、こうして気にかけてくれていたのだ……と思うと、智也はまた嬉しくなった。

同時に、そうやって「友達」として誠意を見せてくれている彼女に白を切り通すのは、不誠実なことのように思えた。

「そう……変なんだよ、唯笑の奴さ……」

肩の力を抜いて、智也は話し始めた。

\*

「かおるはどうしようもないことだって云うんだ。それは俺にもわかる。けどさ……」

土曜日のかおるとの会話を、智也は包み隠さず詩音に話した。

詩音は途中で言葉を挟むことをせず、智也の言葉に耳を

傾けていた。そして、言葉を切って少し考え込んだ智也を促すように、軽く首を傾げた。

「……彩花のことは、知ってるかい？」

不意に問いかけられ、詩音は少し戸惑いながら頷いた。

「少しだけ……今坂さんから伺いました」

「うん……」

智也は窓の外に目をやり、空のどこかを見つめた。

今はもういない誰かを想うその姿は、なぜか詩音を少しだけ悲しくさせた。

「彩花と……俺と……唯笑と……俺たち三人は、いつも一緒だった……。それが、自然だったんだ……」

空に目を向けたまま、智也は少し淋しげに微笑んだ。

「そんな風にいられないのかなって思うのは……俺のわがままなのかな……」

「……」

詩音は眉をひそめて、うつむいた。

答えようのない話をしてしまった。そう思った智也は、物思いを振り切るように、明るい笑顔を作った。

「ごめん。変な話して」

「……」

けれど、詩音はやはりうつむいたままだった。唇を噛み、迷いを浮かべているように見える。口にするべきなのかどうかを。

「双海さん……？」

不審に思った智也がその顔を覗き込むと、詩音は面を上げた。智也の目を見つめ、ためらいながら言葉を紡ぎ出した。

「本当に……自然だったのでしょうか」

「え……？」

その意味が、とっさに智也にはわからなかった。問い返すように、詩音を見つめる。

詩音は悲しみを瞳に宿しつつも、智也から目をそらさな

った。

「あなた方三人がいつも一緒にいたこと……それは本当に、自然なことだったのですか？」

「それって……どういう……」

思いがけない言葉だった。

これまで智也は、そのことを疑ったこともなかった。ただあるがままの姿が、突然壊されてしまったのだと。そして、それが自分のせいだと思っていたからこそ、長い呪縛に囚われていたのだ。それなのに。

智也はやや責めるような視線で、詩音を見ていたかもしれ

ない。しかし、それでも詩音はまっすぐに智也の目を見て話し続

けた。

「私がわかるのかと、思われてもしょうがありません。あなた方の絆は、私になんて計り知れないものなのでしょう。だから……」

「……」

「だけど、それでも……今坂さんの気持ちは……」

「唯笑の……気持ちは……？」

「そうです」

詩音は強く頷いた。

智也の戸惑いは深まるばかりだ。唯笑の気持ちはまた同じだと、当たり前のように思っていた。ずっと一緒だと。だからこそ、今の状況をこうして悩んで

(え……？)

そこでようやく、智也も気づいた。

一緒にいるのが当たり前なら……なぜ、今、唯笑は、離れていこうとしているのだろう？

智也の心にわいた疑問に気づいているのか、詩音は相変わらずまっすぐに智也を見つめていた。そして、言葉を続けた。

「音羽さんと一緒にいる三上くんを見ていることは、今坂さんにはつらいときもあると思います。……私にはわかりませ



図書室を出て、教室へ戻る廊下を歩きながらも、智也は考え続けていた。

詩音の心遣いはありがたかった。その信頼に応えたいいや、応えなければいけないと思う。

しかし、具体的にどうすればいいのか、皆目見当がつかないのだ。

今はまだわからなくても大丈夫だと、詩音は云ってくれた。だが、物事にはタイミングというものがある。今、何か行動を起こさなければ、すべて手遅れになってしまうのではないか。そんな不安と焦燥感が、智也をとらえていた。

(結局は、俺のわがままじゃないのか……?)

どうしても、そう考えてしまう。

誰も傷つけたくないなんていうのは、自分が傷つきたくないだけだ。

今はどんなにつらくても、結局、それが唯笑のためになるのなら……。

足を止めて、智也は大きくため息をついた。

それもまた、言い訳だ。

顔を上げると、教室のドアがあった。いつの間にか目的地に到着していたらしい。

智也がドアを開けると、教室にひとり残っていた少女が振り向いた。智也と彼女は等しく息を飲み、しばし言葉を失った。

「……智ちゃん」

「唯笑」

緊迫した空気と、長い沈黙。今までふたりには無縁だったものが、どうしてこんなに突然やってくるのか。

理不尽とさえ思える腹立たしさを抱えつつ、智也は無理矢理、唯笑に笑いかけた。

「どうした。こんな時間まで残ってたのか？」

「う、うん。学祭実行委員の打ち合わせ……」

「そっか。そういえばそんなのやってたんだっただな。ご苦労さん」

「ううん。……智ちゃんは？」

「ああ、俺？俺は双海さんに頼まれて、図書委員の仕事を……」

「そう……」

上っ面だけのぎこちない会話。耐えられず、智也は鞆を掴んで逃げだそうとした。

「じゃあ、俺、帰るから。またな」

「あ……」

唯笑が何か云いかけたことにわざと気づかない振りをして、智也は教室から出ようとした。だが。

「智ちゃん、待って」

呼び止められ、智也の足が止まった。

振り返るのが、怖かった。

今、振り返れば、これまでぎりぎりの線で守ってきたものが、すべて壊れてしまうような気がした。

けれど、智也は振り返った。振り返って、瞳に涙を浮かべる唯笑の姿を見た。

唯笑の泣き顔なんて、いくらでも見たことがあった。名前の通り、唯笑はいつも笑っていたが、同じくらい、すぐ泣いた。

「唯笑はいつも笑ってなくちゃダメなんだぞ」そう云って、慰めたこともあった。

しかし、このときの涙ほど、智也の胸を突いたものはなかった。

「智ちゃん……どうして……」

「え……?」

「どうして……唯笑じゃダメだったの？」

「唯笑……」

刺すような痛みが、智也の胸に走った。



た。静かに落ちるその雫を、智也は為す術もなく見つめてい

5

家に帰ると、智也は着替えもせずソファに座り込んだ。我知らず、深いため息が口をついて出る。もう七時近い時間だったが、食事のことを考える気にもならなかった。

あのあと、智也とかおるは一緒に学校を出て、帰路に就いた。

いつもと同じように駅までの道を並んで歩き、いつものように同じ電車に乗る。

だが、ふたりの間に会話はなく、終始うつむき加減で、互いの目を見ることがさえ避けているようだった。

やがて、電車がかおるの降りる駅に近づいた。

「じゃあ……」

「あ……うん、またな」

軽く頭を下げて、かおるが電車を降りようとする。智也は適当な言葉も見つけられないまま、その姿を見送ろうとしていた。そのとき。

きゅっ……と、智也の手が握られた。

「かおる……？」

「……」

かおるは何も答えず、うつむいたまま、智也の手を握っていた。しかし、発車のベルが鳴ると、一瞬、智也に切ない眼差しを向けたあと、手を離して電車を飛び降りた。

走り去る電車を振り返ることなく、改札に向かって歩くかおるの背中を、智也は茫然と見送った。

そして、今。智也はぼんやりと自分の手を見つめていた。

かおるのぬくもりが、まだそこに残っているような気がする。

あの短い一瞬で、かおるが伝えたかったものがなんなのか、智也にはわかった。

切なさや痛みと心細さと。一度とそんな想いはさせない、

と約束したばかりなのに。

もう一度深いため息が、智也の口から漏れる。

結局、唯笑との絆を諦めて、かおるを安心させてやるしかないのだろうか。詩音はほかの答えを見つけられるはず、と云ってくれたが、智也にはほかにどうする術も浮かばなかった。

頭を抱え、三度目の吐息をついたとき、電話の音が響いた。

「……」

着信ランプの点滅を、智也はしばらくの間、黙って見つめていた。

電話は鳴りやむ気配がない。

智也はおそろおそろ受話器を取り上げ、かすれる声で答えた。

「……はい、三上です」

「あ……」

相手が、電話の向こうで息を飲むのがわかった。自分が受話器を取るのに勇気が必要としたように、彼女も電話をかけることに迷い抜いたに違いない。

「智ちゃん……」

「唯笑……」

互いのことを確認したあとは、沈黙だけが支配した。

唯笑が話を切り出す勇気を振り絞っていることを知りながら、ただそれを待っている自分を、智也は卑怯だと感じていた。

「智ちゃん……その……今日はごめんね、ほんとに……」

「……」

「音羽さん、大丈夫だった……？」

「……ああ……」

「そう……よかった……」

再び沈黙。互いの息づかいだけが、聞こえてくる。

そして、もう一度口を開いたのは、やはり唯笑のほうから

だった。

「ねえ……智ちゃん……」

「ん……？」

「唯笑たち……、もう……一緒にいないほうが……いいんだよね……」

「……」

「一緒にいないほうが……いいんだよね……」

震える声で繰り返す唯笑に、智也は答えられなかった。

それでいいのか、と云いたかった。けれど、そうやって唯笑をつなぎ止めて、自分が何をしてもやれるというのだろうか。智也には、今の自分はただ唯笑を縛る痛みにしかならないように思えた。

それとも、唯笑は否定してほしくてそう云ったのだろうか？

そうだとしても、同じことだ。唯笑にしてやれることが何もない智也に、口にできる言葉はなかった。

「……ごめん。また変なこと云っちゃった……」

「唯笑……」

「智ちゃんのこと、困らせてばかりだねえ、唯笑は。彩ちゃんに怒られちゃうな」

「……！」

何気なく呟かれたその言葉に、智也は文字どおり、息も止まるほどの衝撃を受けた。

しかし、唯笑はそんな智也の様子には気づかないようだった。

「じゃあ、これで……。ごめんね、ほんとに」

「……」

「おやすみ、智ちゃん」

電話が切れたあとも、智也は受話器を持ったまま立ち尽くしていた。

彩花のことを、思い出していた。

彩花は、いつまでも三人一緒だと云った。

それは、唯笑の気持ちを無視した、傲慢な言葉だったのだ  
ろうか？

「……違う！」  
俺たちは、三人でいるのが自然だったんだ。なぜなら……。  
智也は立ち上がり、家を飛び出した。

6

「ど……どうしたの、こんな時間に？」  
目を丸くして、かおるは玄関に立つ智也を迎えた。  
走り通して来たために息を弾ませていた智也は、呼吸を整  
えると、真剣な面持ちでかおるを見た。その目の色に、かお  
るは鼓動が早くなるのを感じた。

「……悪い。話が……あるんだ」

「話……？」

「ああ……どうしても……会って……話したかった……」

かおるは一瞬、唇を噛んでうつむいたが、すぐに笑顔を作  
って顔を上げた。

「わかった。とりあえずあがって」

「ああ」

廊下でかおるの母に会い、智也は挨拶をした。彼女も驚い  
て目を丸くしたが、あえて追求はせず、いつも通りにこやか  
にお茶を入れてくれた。父親が不在だったのは、智也にとっ  
てはラッキーだったかもしれない。

「今坂さんのこと……だよな」

智也が珈琲に口をつけるのを待って、かおるは問いかけた。  
玄関で智也の目を見たときから、かおるの心臓は高鳴ったま  
まだった。

「ああ。……だけど、その前に」

カップを机に置いて、智也はかおるのほうに面を向けた。  
真剣なその眼差しは、かおるをひどく不安にさせた。

智也は、別れを告げに来たのではないのか。

かおるにはそう思えたからだ。

「かおるに、謝らなきゃいけない」

「謝る……？ どうして……？」

かおるの動悸は、ピークを迎えていた。声が震えているのが

自分でもわかる。智也の言葉を聞くのが怖くて、いつそ耳をふさぎたい気持ちになった。

「もう……悲しませたりしないって、約束したのに……、俺がいつまでも迷ってるせいで、かおるのこと傷つけた……。ごめん……」

「あ……」

安堵のあまり、かおるは大きく息をつきそうになった。

智也の誠実さが、嬉しかった。

「ううん、私のほうこそ、自分勝手なことばかり云って……」

笑顔で首を振りながらそう答えたとき、かおるは新たな不安にとらわれた。

それはまだ、本題ではないのだ。

こうして会いに来たのは、迷った末、智也が答えを出したからに違いない。それではその答えとは、なんなのか……？

再び笑顔を凍らせたかおるを、智也はじっと見つめた。そして、小さく、優しく微笑んだ。

「智也……？」

「双海さんにさ、云われたんだ。俺と唯笑と彩花の三人がいつも一緒にいたのは、本当に自然なことだったのだから。唯笑はその頃から、痛みを抱えていたんじゃないか……って」

「その通りかもしれない、と思った。俺の自分勝手な思い込みで、唯笑の本当の気持ちなんか知ろうともしてなかったんじゃないかって」

智也はそこで言葉を区切り、視線を落とした。珈琲カップに手を伸ばし、もう一口すすする。

かおるは胸を押さえつつ、じっと話の続きを待った。

「ややあって、智也は下を向いたまま、ぼつりと呟いた。

「でもさ、やっぱり違うと思うんだ、それは」

「……」

「痛みは、確かにあったと思う。それは唯笑だけじゃなくて、

彩花にも、……きっと俺にも、あった。誰かといれば、傷つかずにはいられない。悲しいことだけどな」

「うん……」

その痛みには耐えられず、別れを選んだ過去を思い出し、かおるは小さく頷いた。

「今また、同じ痛みを繰り返すのだろうか？ かおるは怯えたような眼差しを智也に向けた。しかし智也は、やはり優しげに微笑んでいた。

「それでも、俺たちは一緒だった。一緒にいるのが自然だったんだ」

「……」

「なぜなら、それが俺たちの望んだことだったからだ」

「望んだ……こと……？」

「そう」

智也は強く頷いた。かおるは一瞬、胸の痛みも忘れ、その勢いに飲まれた。

「俺たちは、共にありたいと望んだ。そばにいたいって、そう考えたんだ。どんな痛みがあっても。だから、一緒にいるのが自然だった」

「……」

「そしてそれは、今でも変わらないって、信じてる」

「……」

「だから、私と別れて今坂さんを選ぶの……？ 震える唇で、かおるはそう呟こうとした。

しかし、智也の言葉のほうに、先だった。

「俺は、かおるを愛してる」

「あ……」

「だけど、だからって唯笑を失うのが当たり前だなんて思えない。もちろん、かおると別れる気もない。……それは俺のわがままか？」

「それは……」

身勝手な台詞、とはかおるは思わなかった。けれど、それ

やはり無理なことではないのだろうか。幼馴染みの三人ならできたかもしれないが、……よそ者の私が割り込んでしまったから。

言い淀むかおるの胸中を察したのか、智也は少し語調を強めた。

「俺は諦めない。いつか一緒にいられなくなるとしても、それはこんな形じゃないはずだ。痛みを乗り越える方法が、離れることだけだなんて、俺は認めない……！」

「智也……」

すでに、かおるの胸の痛みはなかった。

けれど、今度は違う意味で、心臓が高鳴っていた。

智也の決意を、自分はどう受け止めるべきなのか。迷いを示すように、また自分の気持ちを確認するように、かおるは一言一言、ゆっくり呟いた。

「うらやましいな……」

「え……？」

「そんな風に信じられる絆があるのって、うらやましい……」

それと……やっぱり、ちょっと妬けるよ」

「かおる……」

「でも……、でもね、智也が大切に想っているひとを、私も大切にしたい。そう思う……これも、本当」

「……」

唯笑を信じているのと同じくらい、自分のことを信じてくれているからこそ、智也はこの話をしたのだ。かおるにも、それはわかった。

これまで、自分は傷つくのが怖くて、絆が失われるのを諦めていたような気がする。絆がないから、と口にしたことがあったが、本当は確かにあった絆を自ら断っていたのではなかったか。今の智也のように、傷つくことも、傷つけてしまうことも覚悟の上でぶつかっていけば、違う結末もあったのかもしれない。

今度こそ、痛みから目をそらして逃げることはしたくない

い。かおるはそう決心した。

「……今坂さんと、話がしてみたいな」

「唯笑と……？」

「うん。いいかな」

何かを吹っ切ったようなかおるの笑顔をしばし見つめたあと、智也もまた笑顔で頷いた。

翌日の放課後。智也とかおるは、教室で唯笑が学祭実行委員の打ち合わせから戻るのを待っていた。

智也は一度は決意したもの、やはりそれは身勝手な理屈に過ぎないのではないかという思いが拭えず、唇を噛んでいた。

一方、かおるはすでに迷いのない様子で、静かに机に腰掛けていた。

「どちらも、言葉は少ない。」

静かな教室に夕日が差し込み始めた頃、廊下を歩いてくる足音が聞こえ、教室のドアが開かれた。

「あ……」

「お疲れさま」

かおるが屈託のない笑顔で、唯笑に声をかける。

唯笑はぎこちなく笑みを返しつつ、鞆を取りに教室の中へ入ってきた。

「どうしたの？ ふたりとも……」

唯笑の問いかけに、かおるは黙って智也のほうを見た。智也は頷いて立ち上がり、唯笑に近づいた。

「話が……したいんだ」

「唯笑と……？」

「ああ」

唯笑は戸惑った。というより、むしろ怯えた様子で、智也とかおるの顔を交互に見た。そして、やや後ずさるようにながら、作り笑いを浮かべた。

「ごめんね、今日はちょっと用事があった、急いであるから」

「唯笑……」

「ほんつとごめん。じゃあ、またね」

鞆を掴み、唯笑はそくさと背を向けてドアに向かった。その背中に、黙って智也と唯笑のやり取りを聞いていたか

おるが、声をかけた。

「逃げるの？」

「え……」

唯笑の足が止まる。振り返ると、かおるが立ち上がって唯笑を見据えていた。

そのかおるの姿は、智也の目にも挑発的に見えた。

「おい、かおる、何を云って……」

智也の制止を、かおるは無視した。ドアのそばで立ち尽くす唯笑に近づいていく。

唯笑はいつもと違うかおるの態度に戸惑いながらも、視線をそらさずに答えた。

「逃げるって……どういうこと？」

「言葉通りの意味よ」

かおるの態度はにべもない。さすがに唯笑も気色ばんで眉をひそめた。

「変なこと云わないでよ。唯笑がどうして逃げなきゃいけないの？」

「そう？ だったらひとつ答えてよ」

「？」

「なんで、今まで智也のそばにいたの？」

「なっ……」

唯笑と智也は、同時に息を呑んだ。

大きく見開いた唯笑の瞳に、涙が浮かんできた。しかし、泣くまい、という強い決意を面に出して、唯笑は唇を噛みしめた。

「なんでって……」

「智也が彩花さんを好きだから諦めて、今度は智也が私を好きだから諦めるんでしょう？ だったら、どうして今まで一緒にいたの？ 智也が彩花さんを好きになった時点で、離ればよかつたじゃない」

かおるは容赦のない言葉を続けた。智也は止めることもできず、ただ茫然とふたりを見ている。唯笑は耐えきれず、悔

し涙をこぼした。

「ひどい……。ひどいよ、どうして音羽さんにそこまで云われなきゃならないの？」

「別に。私は不思議だから訊いてるだけよ。どうして智也から離れなかったの？」

「どうしてって……」

そこで唯笑は、智也のほうに視線を向けた。しばしじっとその顔を見つめる。そして、強い意思を表して、かおるを見返した。

「……唯笑は……唯笑は、智ちゃんと一緒にいたかったの！それだけだよ！」

薄暗くなつた教室に、唯笑の叫びが響く。

唯笑はそのまま唇を引き結んで、かおるを睨み続けた。が、ふいに優しく微笑みかけられ、狼狽することになった。

「だったら、その気持ちで大事にしなよ」

「え……」

「そばにいるのがつらくても、それでも、そばにいたいんでしょっ？」

「音羽さん……」

「少なくとも、智也はそう思ってるよ」

智也のほうを振り返りつつ、かおるはそう云った。唯笑もおそろおそろ智也の顔を見る。

智也は微笑みながら、ふたりのそばに歩いていった。

「ね」

「ああ」

「智ちゃん……」

唯笑の涙に濡れた瞳を、智也はじっと見つめて頷いた。

「身勝手な台詞だけど……俺は、唯笑を失いたくない。そばに、いてほしいよ」

唯笑の瞳から、涙が次々とこぼれる。けれど、その面には、笑顔が浮かんできていた。

「ほんとに……？ 智ちゃんの中に……まだ、唯笑の居場所はあるの……？」

「……ああ」

もう一度、智也が頷く。唯笑は喜びに頬を染めたが、はつと何かに気づいたように、かおるを振り返った。かおるは微笑んだまま、小首を傾げた。

「音羽さんは……それでいいの……？」

「もちろん。どうして？」

屈託なく笑うかおる。そして、右手の人差し指をずいっと唯笑に突きつけて、片目をつぶって見せた。

「負けないよ」

唯笑は目を白黒させてその指とかおるの顔を交互に見たが、ややあつて満面の笑みで頷いた。

「……うんっ」

\*

それから、三人は一緒に学校を出た。

夕陽がそれぞれの影を長く落とす中、唯笑が少し前を歩き、智也とかおるは並んで歩いていった。

ぴよぴよこと跳ねるように歩く唯笑の後ろ姿を見ながら、智也が小さな声で呟いた。

「これでいつも通り……かな」

その呟きには安堵と、そしてわずかな悔いがあった。本当にこれでよかったのか。そう口にすることはできなかったけれど、迷いはやはりすべて振り切れるものでもなかった。

かおるは智也の横顔に目を向け、小さく微笑んだ。

「いつも通り……いつもと同じ……そんなのは、ないんだよ」

「え……？」

智也は思わず足を止めて、かおるの顔を覗き込んだ。かおるの笑みは優しく、そしてほんの少し悲しげだった。「智也が教えてくれたんだよ？ 日常なんて、どんどん変わ

つちゃうの。自分自身の勇気で変えることもあれば、どうしようもない力で、無理矢理変えられてしまうこともある…。昨日と同じ日なんて、ないの」

「かおる……」

「だから……」  
「さっさと、かおるは智也の手を握った。きゅっと力を込めると、暖かいぬくもりが伝わってくる。大切な何かが。だから、誰もが、自分の気持ちを大事にしなきゃいけないと思う。願うことさえ諦めてしまったら、何も信じられなくなってしまうから」

智也の手を握る力が、わずかに強まる。かおるはかすかに涙を浮かべていたかもしれない。

「大好きなひとと、一緒にいたい。その想いは、絶対諦めちゃいけないの。そうでしょ」

「……」  
智也はかおるの手を優しく握り返した。微笑みながら、かおるに頷いてみせる。

「そうだな。かおるの云うとおりだ」

その言葉に、かおるは花のような笑顔を浮かべた。

無言で見つめ合うふたり と、そのとき。

「もっつ、遅いよお。なにやってるの〜？」

唯笑の声が届いた。いつの間にかだいぶ先に行ってしまった唯笑が、振り返って手を振っている。

智也とかおるは苦笑しつつ、足を速めて唯笑に追いついた。

「悪い悪い」

「ほんっとらぶらぶだねえ。見てるほうが恥ずかしいよ」

「バーカ」

それぞれが痛みを抱えつつ、それぞれが大切な想いを抱いて歩く。

昨日とは違う今日に、変わらない想いを繋ぐために。

了

## あとがき といつ名の言い訳

難産でした……。  
 我ながら、説得力の薄いストーリーだな、と自覚しておりま  
 す。

しかし、唯笑シナリオでの「いつまでも三人一緒だよ」という  
 言葉に感じた違和感。そんなことがあり得るのかな？とずっ  
 と考えていまして、それで、もし本当にあるとしたら、それ  
 を支えるのはほんとに単純な「そばにいたい」という想いなん  
 ではないかと考えました。つらいけど、かなわない想いだけ  
 ど、応えてやれない気持ちだけで、だけどそれでも、一緒に  
 いたい。そんなの無理だよ、と云ってしまえばそれまでで  
 すが、どんな痛みも乗り越えられる想いつても、あるんじや  
 ないかと。

正直、ほんとにあるのかどうかはわかりません。この物語は、  
 とりあえず「ある」と信じて歩き始めたところなので、これか  
 らどうなるかはわからない。その辺が説得力の薄い原因かと  
 思います。彼らなら諦めない答えを見つけてくれるだろ  
 う、という私の願いを込めました。

さて、もともとこの作品は四〇〇ヒット記念として、アルカス  
 さんのリクエストに応えたものです(遅っ)。

アルカスさんのお題は、『ヴェニス』の商人。『ヴェニス』  
 商人』という、有名な肉一ポンドのお話を皆さん思い出す  
 ことでしょうか、実際にはそれ以外にもいくつか興味深いエビ  
 ソードが盛り込まれています(……)ということ、アルカスさ  
 んから教わりました(笑)。

その中で、アルカスさんがテーマに選ばれたのが、「愛を試す  
 女・ポーシャ」です。

ポーシャは主人公の親友の婚約者です。この親友というのが、

シャイロックに借金をした張本人ですね。自分の借金の保証  
 人になったばかりに、主人公の命が危ない、という話を彼が  
 ポーシャにしまして、それでポーシャは自分も力になるうと  
 裁判官に扮して登場し、例の「肉一ポンドを取るのはいいが、  
 血は一滴も流してはならない」というレトリックで主人公を  
 救うわけです。ちなみにポーシャはなぜかこれを婚約者にも  
 内緒で変装してやったので、彼は目の前の裁判官がポーシャ  
 だとは気づきません。

ここでひとつ事件が起こります。実はポーシャは事前に婚約  
 者に指輪を渡していて、それは愛の証だから絶対に手放さな  
 いように、と約束させていました。ところがポーシャ扮する裁  
 判官は、裁判の謝礼としてその指輪をよこすよう、婚約者に  
 迫ります。悩んだ末、彼は親友を救ってくれたお礼をせすに  
 はおれない、ということ、指輪を渡してしまうのです。

この話は結局、喜劇でして、あとでポーシャから指輪がないの  
 を問いつめられて尻に敷かれる……。という結末になるわけ  
 ですが、アルカスさんがこの話をモチーフとして選ばれたのは、  
 「友情を取るか、愛を取るか」というテーマがあったからで  
 す。

これを智也とかおると唯笑で……。と云われたときには、正  
 直、頭を抱えました(笑)。『彼は彼女を救えるか』では不十  
 分だった、唯笑とのけじめ、ということ掘り下げるにはちょ  
 うどいいテーマだったので、創作意欲はわいたのですが、いか  
 せん難しい。単純にどちらかを選ぶ、という結末はまず不  
 可能ですからね。

ということ、あれこれ考えた結果、「どっちも諦めない」と  
 いう展開になりました(笑)。「そんな都合のいい話、認める  
 かーっ」という声もきくとあるでしょうが、なぜそういう展開  
 にしたかは上に書いたとおりです。説得力がないという批判  
 には、ごめんなさいというしかありません。

そもそもアルカスさんは認めてくれるのだろうか(笑)。不安  
 だ……。

最後にもうひとつ。掲示板にも書きましたが、裏のテーマは「唯笑のリベンジ」でした(笑)。でも、唯笑のリベンジもこれから始まるのかな。

とにかく、あんまり潔く身を引きすぎると唯笑ということとを云いたかったのです。

ちなみにラストで、かおると唯笑が「唯笑」「かおる」と呼び合うようになるシーンを書こうかなと思ったんですけど、あんまりくさそうなのでやめました(笑)。この課題は、やはり槻弓さんにお預けしておきます(笑)。

タイトルは、『Kanon』のオープニングからいただいています。正しくは「Last regrets」ですが、「Last Regret」のほうが座りがいいのでこうしました。Keyのゲームの歌は、どれもイメージ膨らませてくれていいですね。次作はきつと「Farewell Song」か「風の辿り着く場所」でしょう(笑)。ご感想など、いただければ幸いです。

二〇〇一・六・一四

八神大輔